

★キューバ友好の集いでの発言＝田中 靖宏（日本AALA代表理事）

11月25日にオンラインによる「第6回全国キューバ友好の集い」が開かれました。フィデル・カストロ没後5周年を記念し、日本AALAの友好団体であるキューバ諸国民友好団体（ICAP）の幹部やラミレス駐日大使らが参加し交流しました。日本AALAから田中代表理事が参加し、以下のような連帯の発言をしました。

先ごろ核兵器禁止条約が五十カ国の批准を得て、発効がきました。被爆者をはじめ日本国民の悲願である核兵器廃絶への大きな前進です。私はいま、フィデル・カストロ議長が存命なら、これについてグランマ紙にどんな「省察」を書いたのだろうかと思いを馳せました。

フィデルが死ぬまで続けた核戦争の危険への警告と核兵器廃絶の訴えは、世界情勢への深い洞察とともに1962年のミサイル危機の直接の体験に裏づけられたものでした。日本側の障害を乗り越え実現した2003年の訪日では、いち早く広島を訪れ「人類は広島の教訓を十分に学びとっていない」と警告を発し、世界の指導者に訪問を呼びかけたことを忘れません。

私は毎年、広島長崎で開かれる原水爆禁止世界大会に参加されたキューバ諸国民友好協会（ICAP）やキューバ政府の代表の方々と何度かご一緒させていただいたことがあります。米国による封鎖と厳しい外貨事情のなかで、とんでもない遠回りをし、ある時は40時間もかけて参加してくれたことを知って、本当に励まされたことを思い出します。

米国による封鎖強化で経済と市民生活の困難が伝えられる中、新型コロナでキューバはどうなるのかと心配しましたが、なんと今、世界で感染拡大を抑え込んでいる数少ない国の一つと国際的に評価されています。先ごろのラミレス駐日大使の講演会で、拡大防止策だけでなく抗ウイルス剤やワクチンの開発、そして手厚い看護体制が効果を上げていることなど現状をお聞きして安心もし、正直おどろきました。

しかも今40カ国近い国々に無料の国際医療団を派遣して数十万人の看護にあたっているとのこと。これは一人ひとりの命を何より優先するキューバ革命の成果だと、日本の一般メディアでも紹介され人々に驚きと感動を呼び起こしていることは私たちも誇らしく思うことです。

キューバと正反対の悲惨な感染状況にあるアメリカは、政治も混迷しています。次期政権を担うと見られるバイデン候補が、「アメリカ第一主義」から国際協調へ転換するといわれております。しかし問題は協調の中身です。緊急を要するパンデミックや地球環境保護の問題での協力は当然ですが、世界の対立をあおる軍事同盟の強化に私たちは反対です。真の平和のためには、社会の体制の違う諸国との共存と主権の尊重が不可欠だからです。次期米政権の本質は、核兵器の廃絶と各国の主権の尊重という大義に向かうのかどうか、不当な封鎖を続けているキューバにどういう態度をとるかにかかっていると思います。

その意味で主権を守って、米国の圧力と干渉に立ち向かうキューバ人民のたたかいは、引き続き世界平和の最前線といってよいと思います。非核・非同盟・中立の新しい日本と平和のアジアをめざす日本AALAは、こうした立場にたってこれからも一層、キューバ人民とのたたかいから学び、連帯を強めていきたいと考えています。

(了)